

読んでみました

田畑光永著

『勝った中国・負けた日本』

—記事が映す断絶八年の転変—

(一九四五年〜一九五二年)

御茶の水書房刊 4600円＋税

(株)新橋亭 取締役会長

会員 呉東富



目から鱗が落ちる

協会の前広報委員長・田畑光永さんの力作を拝読し驚愕の思いです。

というのは、在日華僑二世として太平洋戦争末期に東京で生まれた私は、近代史、特に日中関係史には人一倍興味を持ち、知識もそれなりに持っているつもりでしたのに、本書のいたる所で「目から鱗」を体験しました。夜郎自大を自覚し汗顔の至りです。

1945年に第2次大戦が終わった後、日本と中国の間では交流が途絶えます。両国の歴史では例外的な断絶の時期ですが、それは1952年に高良とみ氏ら日本の3人の現・元国会議員が中国入りするまで、8年間続きました。

本書はその断絶期に、日本の新聞報道に現れた中国関係の記事を辿りつつ、日

本人は中国に敗れた事実をどう受け止めたか、両国民は互いに相手をどう見ていたか、を跡付けています。

目から鱗の例を挙げれば、日本の敗戦直後に首相に就任した皇族の東久邇宮稔彦氏が「中国に謝罪使を特派したい」という意向を明らかにしていたことです。しかも、その特使の候補には日中戦争の発端となった盧溝橋事件当時の首相、近衛文麿氏が挙げられていました。新聞にはちゃんと書いてあるのに、すっかり忘れ去られた事実です。残念なことに東久邇宮内閣が短命に終わったために、謝罪特使は実現しませんでした。もし実現していたらその後の歴史は……と考えさせられました。

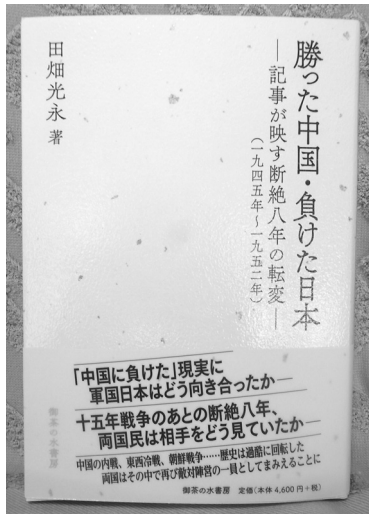
また当時の中華民国・蒋介石主席の「以德報怨」方針によって、大陸にいた日本側軍民は比較的安全な状態で帰国で

きたこと、さらに日華平和条約でも賠償を放棄したことなど、その寛大さはロシアとは大違いだなどと認識し、敬服していたのですが、国共内戦から朝鮮戦争と続く激動のなかで対日講和をめぐる米英の対立など、複雑な経過を受けての台北での日華平和条約調印を知り、自らの歴史観の単純さを思い知らされました。

私の歴史知識はこの程度のもですが、人類にとって過去を見据えることは、統一ドイツ初代大統領故ヴァイツゼッカーの演説「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」を借りるまでもなく最重要事項であるし、水に流すなどの言葉で済まされることではありません。そのような考えでは未来を展望するにも力不足となるでしょう。本書は過去の出来事を正しく把握するためにも良きバイブルとなるし、座右の書に値します。

人々の善意と国民性

大きな歴史の流れを追う一方で、本書には当時の投書に現れた両国の一般市民の相手に対する感情が採録されています。戦後にもなお残る日本人の対中国優越意識に対する在日中国人の率直な批判とそれに対する日本人からの真面目な回答のやりとりがあり、日本人の偏見に対



する中国人女子中学生の痛烈な反論もあれば、一方、日本の庶民の体験からくる中国人に対する素朴な善意の投書もある、という具合です。当時の私はまだ幼児と言っている年頃でしたから、何も覚えていませんが、当時の日本人の善意には、今、読んでも胸にぐっとくるものを感じました。

そう言えば、戦争中の在日中国人に対する日本の扱いは、在米日本人が味わった苦難に比べれば天国みたいなものだった、と聞かされています。ご存知の通りアメリカでは敵性外国人として強制収容所に入れられたり、財産没収の被害にあたりたりした日本人も多かったのですが、在日中国人に対してそのようなことはなかった筈です。もちろん一部に侮蔑行為はありましたが、終戦時に勝った勝ったとわ

が物顔で闊歩した中国人も一部いたようです。どこの国にも人間性に欠ける不心得者がいるのは悲しいことです。

ただそういう個人や集団の行いと国家あるいは国民全体を結び付けて考えるのはどんなものかと私は思います。もちろん、国民性というものは確かにあります。唐突なようですが、日本の旧帝国大学に触れてみたいと思います。東京帝国大学をはじめとして国内に7校、外地に2校の計9校ありました。外地には京城帝国大学、台北帝国大学の2校です。

当時、植民地であった外地に帝国大学を作ることは、時の日本政府が如何に教育を重視していたかの証左であり、台湾の歴代総統の多くは台北帝大か後身の台湾大学OBです。韓国の首相にも京城帝大の出身者がいます。台湾大学は前身を明らかにして誇りにもしているのですが、ソウル大学は一切の過去を記載せずに1946年の創立からが校史としています。それぞれに考えのあることでしょうが、些か残念な気もします。

今年空前の大ヒットとなった台湾映画「KANO 1931海の向こうの甲子園」の題材校、嘉義農林学校は今や国立嘉義大学として校史を誇っております。終戦50年にあたる1995年に、私の

経営する新橋亭は1年間に300件以上の学校関係の会合を承りました。すべてが旧満州の幼稚園から大学までの同窓会です。推測するに満州には1000を超す学校があったのではないかと思われまます。これほど外地に教育機関を充実させた宗主国は歴史上皆無でした。しかも、現地人も入学できたので右のようなエリートを多く排出したわけです。このように植民地政策は功罪相半ばするのが常識であるのに、台湾以外の植民地の統治に対し罪のみが強調されるのは悲しいことだと個人的には思っています。

新たなる決意

昨今の日中関係を見ますと、些かギスギスしたものを感じます。原因がたくさんあるのは承知していますが、一番悲しいのは人種、民族、国籍で決めつける輩が双方にいることです。

一人一人の考え方や人柄を尊重して、異論があれば大いに議論すればよいし、仮に平行線が続くにしても、民間も、国家間も先入観を捨ててて本音を語り合える環境がほしいものです。今年には戦後70年、私も本書を熟読して過去を知り、日中関係の良き未来構築のお役に立てることができれば望外の幸せです。